第52号　50円
昭和53年1月25日

内　容

国際連合システム論…… 1
昭和53年の幸先きを祝う…… 2
開館十周年記念募金追い込みに… 3
国際プログラムの出発に際して… 4
内外人学者シンポジウム…… 4
多彩な国際的集会…… 5
第93回大学共同セミナー…… 7
第94回大学共同セミナー…… 8
館長日記から……11
事業部だより… 9　利用状況…11

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発　行
財団法人 大学セミナー・ハウス
《所在地》
東京都八王子市下柚木
(〒192-03)
電話 0426-76-8511～3
振替口座 東京 74590番
《東京事務所》
東京都中央区日本橋本町3—3
三井銀行本町支店ビル5階
電話 東京 (241)3961
編集・発行人 飯田宗一郎
製作 中央公論事業出版

国際連合システム論

国際連合の本質と現実

前国連大使　斎藤鎮男

ハンス・モーゲンソーは彼の有名な著書 "Politics Among Nations" の中で国連について次のように述べている。「国連発足後の政治環境の圧力により、憲章の条項と実際の運用とが乖離してゆき、ついには国際連合の国際組織としての性格までが変貌した」と。私はこの言葉の実体を究明することによって、私に与えられた演題に対する研究の成果をお話したいと思う。

まず最初に、私は国際連合の基本性格として次の二点を挙げたい。第一は旧連合国中心の考え方であり、第二は国際連盟の教訓の尊重、ということである。つまり第二次大戦における戦勝を新しい平和の基礎におくことが潜在的に当時の指導者の考え方にあり、United Nations という言葉にもそれが端的に表われている。憲章の中にある原加盟国、常任理事国、あるいは敵国条項という考え方は連合国中心を建前としている。また、国際連盟の欠点といわれているものに、そのヨーロッパ的性格、全会一致制、植民地問題や経済、社会、人道といった問題に関する国際協力への熱意の欠如、法律主義（あるいは手続主義）などが挙げられるが、それらを是正しようというのが新しい平和機構の考え方であった。そして言葉をかえていえば、この二つの基本性格が、発足当初、人類が国際連合に期待したものであった。

第二に、モーゲンソーのいう国際環境の変化とは一体何であったのか。どのような契機で国連は変化していったのか。一つは科学技術の進歩、つまり原子兵器の出現であり、もう一つは加盟国が一四七を数え、原加盟国（五一ヵ国）の三倍に増加したこと、といえるだろう。ここで国際政治史上、国連を考える際に大切であると思われる事件を拾ってみよう。一九四五年に国連が発足し、間もなく冷戦が開始される。トルーマン・ドクトリンとマーシャル・プランという大きな出来事のあった四七年が冷戦開始の年と一般に考えられている。次に、いわゆる雪解けが開始されるのが五五年のバンドン会議である。しかし冷戦は依然として続いて、次に変化が見られるのは六四年であると私は考えている。この年に、新興国が加盟国の半数を占めるに至る。第一回アンクタッドが開催され、南の勢力がその立場を表現し、南北問題の発端となる。そして七二年には第一次ソルト交渉の成立をみて、米ソ間にデタントが出てくる。一方では第三回アンクタッドが開かれ、南の要求が世界経済の構造変化のかたちをとり、一段と体制化してくるわけである。

第三に、このような国際環境の下で、現在の国連はどのような政治的動きをしているかを、国際連合システムとしてとらえて、その構造を明らかにしたい。

まず国連システムとは何かを、国際システムと比較しながら考えてみると次の五つの相違点を挙げることができるだろう。第一に、国際システムにおいてパワーとは、軍事力や経済力のかたちをとって現われるが、国連システムでは集票力となって現われる。第二に、国連システムでは構成員に対する規制が働く、つまり加盟国は国連憲章にある原則にしばられ、国際システムの構成員のように自由に動くことができない。第三に、国連システムでは主権平等、国内不干渉という二つの原則により、システムそれ自体に規制が働く。第四に、国際システムにおいては、変化はほぼ無制限に行われうるが、国連システムでは全体の変化がある秩序を伴って行われる。第五に、国連システムはより世界性を持っている、つまり世界国家という秩序としての世界により近い。

次に、この国連システムの中に存在するモデルを極で表現すると次のようである。国連の発足当初は双極性であったが、現在は、①アメリカ、②ソ連、③中国、④EC、⑤非同盟グループの五極としてとらえることができる。極と称しうる条件とは、第一に常任理事国であること（拒否権を持つこと）、第二に強力なグループの背景があること、第三に一般的に国際的力があること、の三点であり、残念ながら日本は極とはなり得ない。非同盟グループは常任理事国ではないが、拒否権を圧倒できる力を持つことで、極として考えることができる。これらの五極は東西関係、南北関係、中ソ関係のかたちをとって軸として動いている。東西関係はデタントということで表面に出てはいないが、依然として中核的基軸である。これに対して南北関係が最も強く表面に出ている。中ソ関係は第二義的基軸であって、国連システムに与える影響はほとんどないが、将来は中ソ間の問題の外にも影響を与える可能性があるので、基軸として考えておきたい。

そこで、このような国連システムの中で現在の国連の特徴を考えてみると次の六点を指摘することが可能である。第一に加盟国の勢力関係の変化、第二に機関の拡散、第三に重要問題への能力不足、第四に一国一票に基づく多数決主義の破綻、第五に国内事項不

（次ページ4段目へつづく）

昭和53年の幸先きを祝う

●国際交流プログラムのために文部省学術国際局留学生課所管に新しく補助金がつく

●学生利用者の経費援助のため文部省大学局学生課所管の補助金が増額される

昭和53年度の政府予算は52年12月23日からの各省予算内示によって方向がきまり、28日に至って運命が決定する。財団法人大学セミナー・ハウスの公的性格を端的に証明するものは、国の補助金とのかかわりである。補助金額の大小にかかわらず、文部省を第一関門とし、大蔵省を第二関門とする政府予算に計上されることは、公共性の高い事業であることの理由によるからである。

しばしば報告するように、目下募金によって国際セミナー館の建築が進行中である。53年6月の落成を基点として、新しい国際交流プログラムの展開が期待されている。まず第一に取り上げたのが在日留学生を対象にした日本人学生を交えての国際学生セミナーの大学教育における位置づけである。井内学術国際局長と飯田館長とのコンビにより、終りに至って補助金がつき、大学セミナー・ハウスの将来は国際化へ第一歩を踏み出したわけである。初年度はわずかに二〇〇万円が留学生課の予算についたわけであるが、この初穂はやがて大きな成果を生み、補助金も年毎に増額されるであろう。

一方では補助金増額の大変に難しい国の方針にもかかわらず、運営費の性格を持つ普通セミナーの予算が五〇〇万円増額されて、二倍となった。共同セミナーに使用される補助金は前年通り五四〇万円である。

十三年目の全面改修工事でユニット・ハウス面目を一新

施設改修協力金によって

当セミナー・ハウスにとって最も重要な施設は学生用宿舎「ユニット・ハウス」であるが、十二年の年月を経て内装はよごれ、雨もりも始まり、改修の必要に迫られていたので、国際セミナー館と交友館の新築に併行して全面改修にふみきった。

11月1日より着工、第7群から第6、第5と順次工事を進め、12月末日までには完成する。

一〇〇棟全部の屋根の張替えと塗装、内装の張替え、外部の補修、各セミナー室の屋根の張替えも実施している。

この工事には、約四、〇〇〇万円を要するので、昭和52年度予算より開始された「施設改修協力金」の第一年度分五〇〇万円を当てるが、今後二、三年間は継続して、この改修工事の残額が予算に計上されるはずである。

今回の改修工事は、利用者を受入れ、業務を中断することなく実施するとの方針で進められたので、一部の方には、申込みの際の希望に沿えずに移動してもらうこともあったが、利用者各位の理解と協力により工事は順調に進んでいる。壁の色彩、資材を改め、すっかり新装をこらしたユニット・ハウスは、新築そのままの姿に蘇った感がある。新年を迎える多摩の丘が、利用者に贈る何にもまさるお年玉である。

53年度の新しい企画を協議

第二回共同セミナー委員会

52年11月4日／18～20時半

私学会館

今回の主要な議題は、次年度に落成する二つの建物（国際セミナー館と交友館）の落成記念セミナーと次年度に迎えることになる第一〇〇回共同セミナーの企画について、おおよその方向を決定することであった。開会に当たって館長より二つの建物の性格、事業の目的について説明が行われ、第一〇〇回記念セミナーを含む三つのセミナーに斬新な企画が練られるよう委員の先生方に要望された。

この他に大学院レベルの共同セミナーの開催、新入生セミナーのあり方、芸術セミナーの開催について種々意見の交換が行われた。

【出席委員】岡宏子、関口晃、野田春彦、青木生子、勝見允行、瀬在良男、谷口汎邦、時永淑、山岸健、池上秋彦、黒田道雄、佐竹寛、外山滋比古、友部直、人見宏、藤村瞬一、村田勝彦（敬称略）

（前ページよりつづく）

干渉の原則のため主権国家の集合体を出られないこと、第六に旧連合国の優位性、ということであるが、以上の六点に即して考えていくと、現在の国連が抱えている問題点を明らかにすることができる。いいかえれば、国連の性格は当初意図したものとは異なる方向に変化しているにもかかわらず、国連の原則である憲章は依然として不変であるということであり、冒頭に引用したモーゲンソーの言葉の通りである。しかし国連は誤って現状に達したのではなく、当初の構想をつきつめて発展させてきた結果であるといえないだろうか。

私はこのような観点から、国連をより同情的に見る姿勢、よりポジティヴにとらえる姿勢が必要であると考える。このことは、とりもなおさず人類にとって国連とは何かを考えることでもあろう。私は現在の国連の役割を次のように評価したい。第一に、国際紛争や南北問題を解決することはできないが、それらを凍結している。第二に、国際的な課題を提起し、それらを整理する。第三に、二国間外交を補完する。そして最後に、異論があるかもしれないが、世界国家への準備機関である、という点を指摘したい。この第四点が私の結論である。

しかしながら、私は現在の国連が世界国家に直接つながるものとは考えていない。われわれは延長線にその光すら見い出すことはできないだろう。だが、国連の活動を通して世界の世論を世界国家の方向に導くこと、これこそが国連の使命だとはいえないだろうか。それは声高に叫ばなくとも、世界的規模でその機能を発揮させていく過程において、世界国家への準備が行われていくだろう。そのための準備として何をなすべきかと問われたなら、私は次のように答えたい。一つは憲章の改正である。人類は最小限の政策を試みることによって国連の暫定的改造を求めるミニマリズムを指向していかねばならない。もう一つは、これに対してマクシマリズムの指向である。何らかの契機が与えられて世界国家が将来実現しうるとすれば、その世界国家はこうでなければならない、という明確なブルー・プリントを人類は用意しなければならない。国連批判は、このブルー・プリントなくしてはもはや成立しないだろう。（第92回大学共同セミナーのゲスト講演より。なお詳細は斎藤鎮男著「国際連合論序説」（信有堂刊）を参照されたい。文責・編集者）

開館十周年記念募金追い込みに入る

常任委員会の朝食会で
残る五、〇〇〇万円の募金方策を協議

昭和52年11月15日／於パレスホテル

前号に既報のとおり、開館十周年記念募金は、この経済不況の中にもかかわらず順調に進捗している。いよいよ目標二億円にあと五、〇〇〇万円を残すという段階で、去る11月15日募金委員会の常任委員会がパレスホテルに於て開催された。

当日は、稲山嘉寛委員長（新日鐵会長）、小山五郎氏（三井銀行会長）、佐々木邦彦氏（富士銀行会長）、井深大氏（ソニー名誉会長）、安居喜造氏（東レ会長）、瀬川美能留氏（野村證券会長）代理、花村仁八郎氏（経団連副会長）代理、法人側から、茅誠司終身理事、川喜田理事長、飯田館長らが出席し、8時30分より朝食を共にしながら協議した。

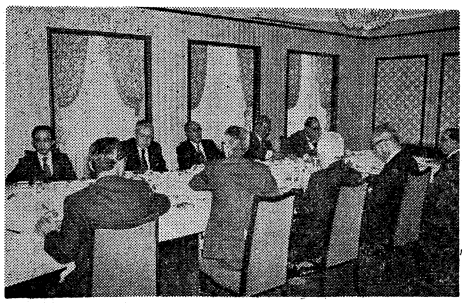
残る五、〇〇〇万をいかにして募金するかについて、未決定の業種に継続依頼することは勿論、団体ごとの寄付とは別に個別に各社に追加依頼の可能性を検討した。

なお、前号掲載分以降の募金応募企業名は次のとおりであり、財界募金のみで一六、九四一万円（昭和52年11月15日現在）となった。

【経済団体】関東百貨店協会

【個別企業】日野自動車、麒麟麦酒、日本電気、東亜燃料、富士フィルム、京王プラザホテル

【追加申込企業】ソニー、野村證券、清水建設、東京電力、日清製粉、ブリヂストンタイヤ



募金常任委員会一向い側右より佐々木，小山，稲山，安居の諸氏

寄付金報告

52年11月末現在

◆開館十周年記念事業寄付金

第五報（52年10～11月）

一〇、〇〇〇円　当ハウス元職員　伊藤清子殿

五、〇〇〇円　慶応大学通信学部二年　岩崎良子殿

六、〇〇〇円　第93回大学共同セミナー指導教授　日本女子大学教授　青木生子殿

評論家　西郷信綱殿

明治大学教授　木村正中殿

日本女子大助教授　麻原美子殿

国文学研究資料館教授　松田　修殿

筑波大学教授　平岡敏夫殿

一〇、〇〇〇円　学習院大学教授　辻　邦生殿

五、〇〇〇円　当ハウス館長夫人　飯田八千代殿

二〇、〇〇〇円　第94回大学共同セミナー指導教授　国際基督教大教授　柿内賢信殿

東京工業大学教授　八木誠一殿

東京大学助教授　村上陽一郎殿

東京都精神医学総合研究所　参事研究員　荻野恒一殿

五、〇〇〇円　双葉学園理事長　深谷のぶ子殿

一〇、〇〇〇円　東洋アルミニウム専務取締役　上谷琢之殿

五、〇〇〇円　映像民俗学を考える会殿

◆一般寄付金

二、〇〇〇円　明治大学工学部　松瀬ゼミ殿

三、〇〇〇円　慶応大学法学部　池井研究会殿

二、〇〇〇円　㈶関西地区大学セミナーハウス　山下勝弘殿

◆植樹寄付

三、〇〇〇円　氷シンポジウム（代表北海道大学工学部教授東晃）参加者一同殿

◇館長喜寿祝準備基金

一〇、〇〇〇円　当ハウス元職員　伊藤清子殿

三、六五円　第93回大学共同セミナー　参加学生一同殿

三、四〇〇円　第94回大学共同セミナー　参加学生一同殿

◇現物寄付

純銀製松盆栽一基

トージョー・ダイヤモンド・コーポレーション代表者　東条秀光殿

遠来荘写真一幅（カラー、額入）　田中　誠殿

寄贈図書

52年5～6月

「散文の季節」　吉田夏彦殿

「紀要第八集」　日本大学精神文化・教育制度研究所殿

「Peace Research In Japan」　日本平和研究懇談会殿

「採集と飼育」5～6月号　日本科学協会殿

「空間の理論」　中村和郎殿

「現代経済学の潮流」「資本主義・社会性・参加」　松浦　保殿

「金融経済」162　金融経済研究所殿

「商学論纂」18巻4号、「経済学論纂」17巻6号、「紀要　文学科」39・40号、「紀要　哲学科」23号、「仏語仏文学研究」9号、「ドイツ文化」24号、「法学新報」83巻4～6号、「中央評論」三六、「比較法雑誌」10巻1号、「大学院論究」9巻1号　中央大学学事部殿

「Asian Culture」No. 16　ユネスコ・アジア文化センター殿

「新建築ハンドブック」4　十代田知三殿

「近代世界文学」第4、11巻、「現代小説の可能性」、「『ノヴェル』と『ロマンス』」　小池　滋殿

「南極」「南極の氷」「Antarctica」　鳥居鉄也殿

「早稲田法学」52巻1・2号、「早稲田法学会誌」27巻、「人文論集」14号　早稲田大学法学会殿

「生物学」　開成出版殿

「紀要」8号、「SSI Journal」No. 30　早稲田大学システム科学研究所殿

「早稲田フォーラム」17号　早稲田大学広報課殿

「昭和53年度版　精解学校六法」　相良惟一殿

「科学者の疑義」　エッソ・スタンダード石油殿

「社会学論叢」69号　笠原正成殿

「私立大学」　尾形　憲殿

「国際法学と弁証法」　安井　郁殿

「東京大学経済学部50年史」　東京大学経済学部殿

「跋渉　野外体育論序説」　里見昭二郎殿

「世界のビジネスマンとつきあう法」　金山宣夫殿

「Asian Urbanizing」　一ノ瀬智司殿

「めばえ」　池田公麿殿

「南北問題」「自立する第三世界と日本」　川田　侃殿

「死の谷をすぎて―クワイ河収容所―」　斎藤和明殿

「西洋精神の源流」　後藤光一郎殿

「杉山茂丸―明治大陸政策の源流―」　一又民子殿

「この子の中の歴史と未来」　近藤薫樹殿

「白球太平洋を渡る」　池井　優殿

「大学広報入門」　徳永　清殿

「Education for Peace—reflection and action—」　浮田久子殿

「東南アジアとの対話」「Dialogue—Southeast Asia and Japan—」　小林歩三殿

「国際交流」13　国際交流基金殿

「府中20年のあゆみ」　府中市殿

「俳句鑑賞　蕪村の人間像」　船津隆一殿

「島根県仁多郡仁多町高田調査報告書」　高野雄一殿

「国際組織法」

国際プログラムの出発に際して

国際プログラム委員会委員長 川田侃

この度、大学セミナー・ハウスが新設した「国際プログラム委員会」の委員長をお引き受けすることになった。この新しい委員会の仕事は、館長の諮問に応じて、大学セミナー・ハウスが行う国際プログラムの企画と運営および国際セミナー館の活用について意見を具申することである。なかなか責任の重いむずかしい仕事であるが私が非力を顧みずにお引き受けしたのは、むろん国際交際のための教育事業が今の日本にとって非常に大切と考えたためでもあるが、何よりも私が大学セミナー・ハウスを信用しているからである。

大学セミナー・ハウスはこれまでもその独自の事業活動を通じて、きわめてユニークな方法で、内外の大学間交流を積極的におしすすめ、すでに立派な業績をあげてきた。「大学共同セミナー」「大学教員懇談会」「国際学生セミナー」などがそれであるが、さらにさきごろ開館十周年（昭和50年）を記念して、国際交流教育事業をいっそうさかんにすることをめざして、国際セミナー館の建設に踏み切った。

このことを聞いて、国際交流の仕事に大学セミナー・ハウスが新たに少なからぬ意欲を燃したことを知って、私は嬉しく思い、また大学セミナー・ハウスの存在がいちだんと頼もしく思えた。これまでの大学セミナー・ハウスの業績から考えても、また飯田館長はじめ、海老沢部長、綿引主任、飯田（能子）主事等々、そのスタッフの人材から考えても、いまのセミナー・ハウスには国際交流の事業を充実し推進していくだけの力が十分にあるからである。

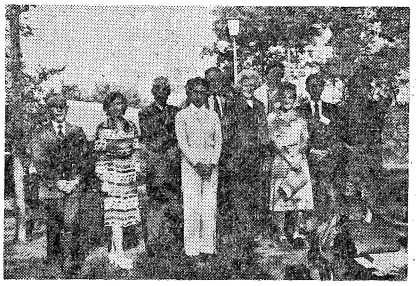
はからずも、こんど「国際プログラム委員会」の委員長をお引き受けすることになり、これからは外野から拍手しているばかりではいられなくなった。この新しい仕事に私も乏しくとも幾ばくかの貢献をしたいと念願している。ただ、ひとつは大学セミナー・ハウスがしっかりしていること、もうひとつはこの新しい国際プログラムの委員の方々の顔ぶれをみると、みなその道の練達の士であるのみでなく、どの委員の方もこの仕事に気持を寄せて下さって力をかして下さるように思えるので、誠に心丈夫である。

大学セミナー・ハウスのこの新しい国際プログラムから、次々と良い仕事が生まれてゆくことを祈り、内外の諸大学の学生・研究者、そしてそれを支えて下さる多くの人々のこのプログラムに対するご賛同とご協力を仰ぎたいと思う。

（上智大学教授）

内外人学者シンポジウム

来日する著名な外国人学者を主賓として、少数の日本人学者によるシンポジウムがこの期間2回にわたり開催された。



右より徳末，堀野，山之内，フーバー，ヤロー夫妻，浮田，飯田，川田夫妻の諸氏（出会いの丘で）

▼第1回

クラレンス・H・ヤロー博士を主賓とする平和問題懇談会

10月15～16日

ヤロー博士は、クェーカー教徒として、生涯を平和問題の研究と実践に捧げた第一人者であり、アメリカン・フレンズ・サービス・コミティの国際部ディレクターとして、二〇年に及ぶ実践活動に従事、世界各国に起る紛争のたびに直接現地におもむき、和解の仕事に没頭した学者である。

ヤロー博士は、クェーカリズムの発祥の経過から激変する国際情勢、特に東西ドイツ問題、インド・パキスタン紛争、ナイジェリア内紛等について、「三つのケース・スタディ」として論及、クェーカー教徒がプライベート・オーガニゼーションとして、いかに正式外交交渉を円滑にするのに役立ったかについて解説された。

国際関係論の専門家を加えた参加者との懇談は、極めて格調の高い論議が続き、時間の不足が残念であったが、氏の人格、学識、信仰は強い感銘を一同に与え、意義深い会合であった。

翌朝7時には、出合の丘にヤロー博士を中心に有志が自発的に参集、クェーカー独特のサイレント・メディテーションの集りが開かれ、朝の冷気の中、厳粛な空気がハウスを満たしていた。

当日は、上智大学の川田侃教授

平和問題懇談会に参加して

November 24, 1977

Recently I had the pleasure of participating in a forum on "International Conciliation" led by Dr. Clarence Yarrow. First, let me say that I found Dr. Yarrow's presentation very informative and stimulating. The combination of personal experience and scholarly research provided great insights and clarity to the issue.

From the moment of arrival it was evident that I was in for a very worthwhile, enjoyable experience. The facilities and surroundings of the Seminar House are very conducive to a pleasant intellectual exchange. The Seminar House provides an atmosphere of warm, friendly interchange but also one of serious purpose and deep dedication to the task of bringing about better understanding between peoples.

The other participants brought a wide variety of backgrounds and experiences to the seminar. There were enough people to provide many viewpoints and approaches but not so many as to impede discussion. The issues which they raised and the suggestions which they made reflected great depth of thought and sensitivity to the problems. I found it particularly refreshing that people were addressed and opinions freely exchanged with only a minimum of attention to titles and rank. Although the time we spent together was very brief, I sensed a bond of camaraderie among the participants as we wrestled with problems of "international conciliation" and more generally with problems of living in a truly international world. It was especially valuable to be able to continue the discussions until the wee hours of the night.

If the opportunity to participate comes again, I'll quickly say "yes."

William D. Hoover

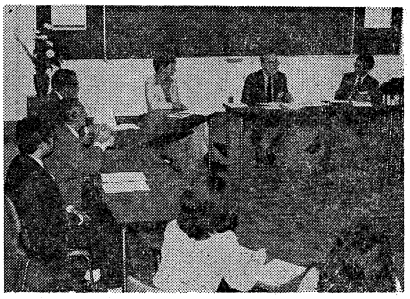
（当ハウス国際プログラム委員長）が議長としてプログラムを主宰された。

【出席者】クラレンス・H・ヤロー博士夫妻、川田侃（上智大）、同夫人、横田洋三（ICU）、徳末愛子（日本女子大）、藤村瞬一（津田塾大）、浮田久子（日本平和研究懇談会）、山之内多恵子（キリスト友会）、堀野定雄（神奈川大）、W・フーバー（フルブライト研究員）、飯田宗一郎館長他スタッフ

▼第2回――

ルイス・ベンソン氏を囲む懇談会　**11月8～9日**

第2回の懇談会はクェーカリズムとその始祖ジョージ・フォックス研究の第一人者であるルイス・ベンソン氏を囲んで開催された。第1回に引続いてクェーカー教徒を囲む会となったにもかかわらず、学生を含めた参加者により、内容ある懇談会となった。



正面，ベンソン夫妻と古屋教授

講演は、キリスト教史においてユニークな位置を占めるクェーカリズム、特にジョージ・フォックスの信仰と困難な人生体験から出発するキリスト教福音の新しい理解―ニュー・ゴスペル―について解説し、参加者は一人残らず質疑応答に参加して、興味深い懇談が続いた。

当日はICUの古谷安雄教授が司会者となり、学生を含めた参加者の質問を巧みにひき出され、一同に深い感銘を与えた。

【出席者】ルイス・ベンソン氏夫妻、古谷安雄（ICU）、斎藤恵彦（東京外語大）、佐藤共子（一橋大）、ベバリー・ネルソン（一橋大）、山之内多恵子（キリスト友会）、岡村謙一、小川博（基督聖協団）、飯田宗一郎館長他スタッフ

【学生参加者】林田雅至（東京外語大）、川田理恵子（中央大）、川原徹子（筑波大）、片岡素子（津田塾大）、外、東海大学生5名

＊　＊　＊

毎回シンポジウムの後には、ささやかではあるがパーティ形式のもてなしが行われ、なごやかな雰囲気の中で、人間的出会いをつくり、相互の連帯を深める結果になった。このようにして国際交流の広場が多摩の丘に育つであろう。

多彩な国際的集会

当ハウスを会場に開催された主な国際的集会は次の通りである。

①第29回日米学生会議（7月25日～8月3日、外国人34名）
②第24回国際学生会議（8月4日～9日、外国人40名）
③ユネスコ・アジア文化センター主催「第10回アジア地域出版技術研修コース」（9月29日～10月1日、外国人20名）
④オレゴン州ウィラメット大学日本研究グループ（9月2日～17日、外国人31名）
⑤英語教育協議会（ELEC）中・高校英語教師研修（8月15日～21日、外国人講師10名）
⑥語学教育振興会（COLTD）フランス語集中講義（8月21日～30日、外国人講師2名）
⑦ELI英語学研究所研修（9月30日～10月1日、外国人16名）
⑧東京都高校英語研究会（8月15日～17日、外国人講師3名）
⑨日豪学術文化センター主催、日豪合同セミナー（11月16日～17日、外国人18名）

この他にも、大学単位のゼミ、語学関係専修学校などに参加者あるいは指導者として外国人が来館している。当ハウスは、主として食事時を活用し実施している学生交歓会を、外国人学生の歓迎と内外学生の国際交流の機会としてとらえ、効果をあげている。

なお特殊な利用者として日本研究講座を持つ外国大学の滞日学習のグループがある。当ハウスとしては、今後この種の協力を活発に行いたい方針である。

前掲、米国オレゴン州セーレムにあるウィラメット大学は、国際商科大学の姉妹校であり、毎年相互に学生を送って、交流と現地研修を行っている。本年は三一名のアメリカ人学生の滞日最初の二週間をお世話した。参加者の感想にもあるように、語学研修にも増して同じ時期に当ハウスを利用していた他の日本人学生グループとの接触が、日本文化の理解、日本人的思考と日本語の学習に役立ったようである。

ここには、次の諸会議あるいは研修に参加した学生またはリーダーの印象を掲載する。

❶国際学生会議
❷日米学生会議
❸英語教育協議会セミナー
❹アジア地域出版技術研修コース
❺ウィラメット大学日本研究グループ

❶第24回国際学生会議を終えて

第24回国際学生会議組織委員長　**小笠原恒夫**

第24回国際学生会議（ISC）は、8月3日、東京九段会館での開会式を皮切りに、一五日間にわたって繰り広げられた。参加外国代表団は総数七ヵ国四〇人、香港、インドネシア、韓国、マレーシア、シンガポール、タイ、南太平洋（フィジーおよび西サモア）である。

今回のISCテーマは「多様化する国際社会への対応」であった。セミナー・ハウスで催された本会議では、その〝多様性〟が、教育、マスコミュニケーション、資源の各視点から、具体的に浮きぼりにされていったのである。

今回の参加国は、多くが東南アジア諸国であった。近年、日本と東南アジアとの交流活発化が叫ばれはじめてきている。そして、様々の交流論、政策、計画が、多かれ少なかれ〝国益論〟のみに帰着してしまう現象は、日本の東南アジア観（第三世界観）の貧困を、そして世界の多様化現象の認識欠如を表わすものだろう。ISCが、そういう問題に役立つものと信じ、私たちISAはISCを主催してきた。

最後に、大学セミナー・ハウスの係の方々にISC組織委員会を代表し、お礼を申し上げたい。私たちの団体は一〇〇名を越す大所帯であり、しばしば運営スタッフの不注意でセミナー・ハウスにご迷惑をおかけしたと思う。にもかかわらず様々の便宜を取りはからっていただいたことを感謝申し上げたい。

セミナー・ハウスは、この種の会議のための施設として申し分なかろう。香港の学生は、それを「快適で思考を集中しやすい」と表現していた。私はその意見に同意する。

（大阪大学4年）

＊　＊　＊

❷第29回日米学生会議を終えて

第29回日米学生会議実行委員長
広木 重之

7月22日より一ヵ月にわたって開催された今年の日米学生会議も、8月22日の米国側代表団の帰米をもって成功のうちにその幕を閉じた。戦前の暗雲漂う昭和9年に第一回会議が始まって以来この四三年間に、実に29回もの学生の自主的運営による日米学生会議が開かれ、その時代、時代が抱えている諸問題について、日米両国の学生の間で真剣な討論がなされてきた。本会議の最終的目標が、両国の相互理解および友好の促進にあることは疑いをはさむ余地がないが、単なるお互いの文化の紹介というレベルを越えて、それぞれの社会が直面している諸問題の徹底的な討論を通じて、異質な社会に対する洞察を深める「学びの場」であるという所に本会議の一つの大きな特徴が存在する。また、アメリカ人との一ヵ月にわたる共同生活を通して、彼らの物の考え方や見方を直接に肌で感じることのできる貴重な「経験の場」としても大切な役割を果たしている。

今回の会議は、現代日米双方の社会における、個人の社会に対するかかわり方に焦点をあてて、「個人と社会」という総合テーマの下で開かれた。日程としては、まず八王子の大学セミナー・ハウスにおいて10日間にわたる集中的討論を行った後、富山シンポジウム、過疎の利賀村訪問、金沢・永平寺の研修旅行を通じてわが国の現状を直接実地に学び、最後に関西地区大学セミナー・ハウスにおける総括会議で、一ヵ月間に得た経験や会議の成果をまとめ上げ、報告書を作成する形で行った。

八王子会議は右のように、今回のプログラムの中では、実質的意味において最も重要な部分を占めていたのであるが、両国学生が互いに胸襟を開き親睦を深める場としても理想的であった。会議期間中には、地元の方々の御協力による盛大な盆踊り大会にもお招きいただき、忘れ難い思い出をつくることができた。また、我々の宿泊施設であるユニット・ハウスは、深夜の会議に絶好であり、毎晩、昼間の公式の討論の場では話し合わないような、より身近かで個人的な話題—学生生活、将来の生き方等の話に花を咲かすグループが絶えなかった。

日米学生会議と大学セミナー・ハウスとのお付合も今回で六回、一一年目である。米国での会議は常に大学の寮、校舎を利用して行われるが、日本の場合それだけの施設を持つ大学はほとんど皆無であり、東京近郊で会議を開く限り、自然環境・施設そしてコストの面からいって、ここに勝る施設は他にない。

(一橋大学3年)

❸英語教育協議会セミナー

A first visit to a place is often memorable; a second, repetitive and a third, stale. What, then, is the MAGIC of the INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, at Hachiooji, that each of my six visits has been more enjoyable and impressive than the last?

Is it the continuous fashion show put on by nature, in its ever-changing elegance? Is it the calm and tranquility, the pure, fresh air, the fragrance and sight of flowers and trees in season? Or the harmonious blend of man's latest technology in architecture with the natural beauty of an ancient, verdant hilltop?

Each of these it is; and a combination of all, and, of other factors. It is a haven of peace for the metropolitan-weary dweller. An oasis in the turbulent stream of daily life, where old friendships can be renewed, and new ones formed; it is a market place——where young and old from all parts of Japan (and, more and more, of the world), can meet to exchange ideas. It is a place whose experiences, shared, lead to mutual understanding. It is a place to hope; a place to explore man's intellect and enjoy the wonders of nature.

Strange: the more the mystery is analyzed, the more elusive its solution becomes. Can we start again?

The INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE is the material manifestation of a dream—a dream which represents the highest and noblest ideas of the mind of man.

Much too enigmatic, you say? True! But enigma, itself, is much of the attraction of I-USH.

Oh, please excuse me a moment: that tree just outside the window, it looks like a chestnut full of almost-matured nuts on limbs heavy with recently fallen rain. Has it always been there? It's worth a closer look! Be back soon....

RB
Instructor of English

❹アジア地域出版技術研修コース

I feel greatly indebted to Mr. Soichiro Iida, the Director of the House and his Staff for their hospitality and friendliness. My stay was extremely enjoyable. The accommodations, facilities and food are excellent. The site of the Seminar House was well chosen and its set up was indeed well planned. It is situated on a high ground and there it commands a fine view around it and also of the distant mountain ranges. Besides that, it is in the woods and quite far from the city and this gives me a quiet and peaceful atmosphere. This type of atmosphere is very conducive for serious study and holding of seminars. With regards to the set up, it gives the opportunity for the participants to stay together, learn together, eat together, etc., and thus mutual friendship and understanding is fostered.

One of the occasions which impressed me most and would be renew forgotten was the traditional tea ceremony. As I always appreciate and very fond of old traditions and customs, I felt greatly honoured with that traditional welcome accorded by the Inter-University Seminar House. I wish also to express my heart-felt gratitude to the Seminar House for holding a gathering with students of several universities in Japan during dinner on the last night of our stay and entertaining us with Japanese folk songs.

To conclude, on behalf of all the participants, I wish the Seminar House every success. Abu Khair bin Ismail

❺ウィラメット大学日本研究グループ

Living in a group situation strengthens the bands between people and forces a person to cope and adjust to things that may normally bother him. One of the most valuable experiences I feel I had at the Seminar House was the opportunity I had to meet students from various Japanese Universities. The interaction between students of different culture creates a band of friendship I had never experienced before; one of mutual understanding. Werdy L. Ganbill

We were privileged in many ways and it made our first days going through "culture shock" much easier to handle.

Julie A. Barbour

第93回大学共同セミナー

主題――文学における死

――日本人の死生観にふれて――

期日――昭和52年10月7～9日

＜主題講演＞

筑波大学教授　村松　剛氏

＜セクション演習＞

A　古代人は死をどう考えたか
　　評論家　西郷信綱氏

B　哀傷の深化―源氏物語の死を中心に―
　　明治大学教授　木村正中氏

C　乱世の死相―妄執の行くえ―
　　日本女子大助教授　麻原美子氏

D　近世人の死生観―愛と義と死
　　国文学研究資料館教授　松田修氏

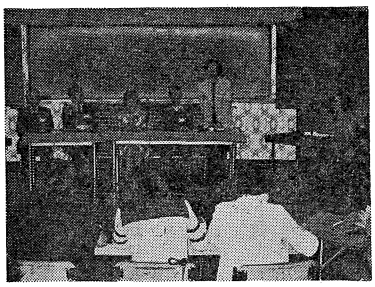
E　戦争と死と文学と―とくに日露戦後文学を中心として―
　　筑波大学教授　平岡敏夫氏

＜運営委員＞

日本女子大学教授　青木生子氏

＜参加学生＞100名（内女子80名）

日女大(28)、筑波大(12)、慶大、津田塾大(各7)、東女大(5)、東京学芸大、お茶の水女大、早大(各4)、ICU、聖心女大、明大(各3)、東大、東工大、都留文科大、上智大(各2)、東外大、横浜国大、国学院大、実践女大、芝浦工大、成蹊大、中大、フェリス女大、和光大、相模女大、鶴見大、大妻女子短大(各1)、合計27校



右より青木，西郷，木村，麻原，松田，平岡の諸氏

◇　◇

今までに開催された文学セミナーは、一つの作品に焦点を当てた研究方法に関するものと、比較文学の分野のものであって、ある主題を問題にしながら日本文学を正面から取り上げるという形のセミナーは今回が最初の試みであった。企画には、古代文学の青木生子日本女子大教授が誠心誠意取り組まれたお蔭で、別記のようにそれぞれの領域で優れた研究をされている方々を講師陣にお迎えすることができた。

日本の文学の流れの中で、死はどのように扱われ描かれてきたか。古代から近代までに生み出された作品から、それぞれの時代に日本人がどのように生きて、どのように死を考えてきたかを学ぶことは、われわれ現代人が人間存在の意味を問い直すことにもなるであろう。予想に違わず学生の反響は大きく、一〇〇名の参加者を数えたが、その六割が文学専攻の学生であること、女子が八割を占めていたこと、韓国とアルゼンチンからの二名の留学生の参加があったことなどが目立った特色である。

ともすれば、作品から離れて〝文学〟を論じがちなわれわれに、今回のセミナーは、文学することは、作品に向きあって文章を丹念に読みとっていくという地味な作業を積み重ねることである、という大きな示唆を与えて、その幕を閉じた。

♥「文学すること」を学んで

（Aセクション）　三原晶子

デリカシーのない人間は嫌だと常々思っていたのだが、セミナーに参加して、自分こそがそれだと知らされ愕然とした。謙虚な姿勢が何よりもデリカシーに通ずるものなのだと、今つくづく思う。

大学で文学を学び四年になるが、ここに来るまで、文学する者の態度を知らなかった。〝文学作品は水中の魚であり、水から引き揚げ殺してしまっては何にもならぬ。生きた作品にこそ意味があるのだ〟というようなことを、西郷先生始め諸先生に身をもって教えられ、飛び上るほどのショックを受けた。文学も物ではなく生き物なのだ。そのことに鈍感になっていた私は文学に対して不遜であった。先生方の、あくまでも謙虚な文学への姿勢を、そのお話の度に教えられ、私は目の覚めたような気がした。

それに加えて、現代は価値観を喪失した時代といわれるが、その中で何かを摑もうと、ひたむきに学問する仲間を見て、私はとても勇気づけられた。私の日常である大学にあっても、何かを求め動き回っている仲間は少なくないが、そこを抜け出したここでも、多くの仲間が虚無の上にあぐらをかいていないことを知って、感激は一層であった。

共同セミナーは、虚ろだった私のデリカシーを揺り起こしてくれた。卒論の種探しに出かけた私に、種を蒔く前にもう一度、土地を耕し直すことをせよ、と教えた。学生最後の年に、この貴重な体験に巡りあえたことを、本当に感謝している。文学に限らず、もっともっと謙虚になって、より大きく、豊かに、人生を送ろうと強く思う。

（早稲田大学4年）

♥留学生のセミナー体験記

（Eセクション）　金　采洙

人生は邂逅だという。邂逅は別れを意味する。再会のない別れとは一種の死を意味する。死は惜別の情で我々をより高い高尚の境地へ至らせる。私はこんな境地からひとりの留学生として今回の大学共同セミナーの三日間の生活を鳥瞰してみたい。

なによりもまずいいたいのは、三日間、林の中で過ごした生活はちょうど私が前から望んでいた夢だったということである。この夢の中の生活でもっとも気付いたのはその生活が規則正しかったことである。決められた時に、決められた所で、決められた人々と会ったこと、迎えのバスの正確な到着、親切な案内人に導かれた規則的受付・登録等々、私の行動のひとつひとつのすべてがすでに決められたような気がした。まるで神の予定だという考えがした。「日本人の計画はすなわち実行である」との事実に驚いた。

また再び驚いたのは、主題講演から全体集会に至るまで、綜合及び分析、分析及び綜合を通して参加者全員にセミナー全体の内容を理解させ、全員をしてひとつの結論に至らせる日本人の高度なセミナー方法であった。学生達のすべてが決められた計画に柔順なこと、彼らは伝達される知識を批評なく受け入れてよく消化してから、新しい結論を引き出していたようだ。

また学生達の交流及び社交にも気が付いたが、外からは消極的に見えるが、その消極的態度の中には礼儀正しい勇気があって、集会の終りに至っては、気の合う人々が同じ心になって、市内のあるビヤホールへ向かうのを見て韓国学生なりに感じ入ったところがあった。

留学生である私に対し、親切にして下さったのも一生忘れられない。

死は忘却された情を呼び起こさせ、また死は永遠と接して真実を教え悟らせる。しかし、「理」だけを求め過ぎる合理主義の時代は、ある立場から見れば「死離れした時代」であるといえる。こんな時代であるからこそ、今回のテーマは、ひじょうに適切であったと思う。

（筑波大学地域研究研究科修士1年）

第94回大学共同セミナー

主題――自然科学とキリスト教

――西欧における二つの普遍と特殊――

期日――昭和52年11月11～13日

＜全体講義＞

Ⅰ　自然科学とキリスト教
　法政大学教授　山崎正一氏

Ⅱ　自然科学とキリスト教―医学の立場から―
　浜松医科大学学長　吉利　和氏

＜セクション演習＞

A　科学の真理とキリスト教の真理―一七～一八世紀イギリス思想史の一断面―
　国際基督教大学教授　柿内賢信氏

B　科学的認識と宗教的信知
　東京工業大学教授　八木誠一氏

C　近代科学技術とキリスト教の功罪
　東京大学助教授　村上陽一郎氏（運営委員）

D　精神医学とキリスト教―宗教的実存の回復を求めて―
　東京都精神医学総合研究所
　参事研究員　荻野恒一氏

＜参加学生＞87名（内女子43名）
東大、東女大(各8)、筑波大、慶大、津田塾大、早大(各7)、東医歯大、中大(各4)、ICU、上智大(各3)、東農工大、お茶の水女大、都立大、杉野女大、清泉女大、立教大(各2)、東学芸大、東工大、都留文大、独協大、青学大、共立薬大、駒沢大、成蹊大、成城大、大正大、東神大、東理大、明大、女子栄養短大(各1)、その他(3)、合計30校。

◇　◇

西欧文化の最大の柱であるキリスト教と自然科学は相互に敵対的なものと理解されることが多かったが、最近の科学思想史や認識論の成果は両者の関係を「同根」として捉えることを迫っている。

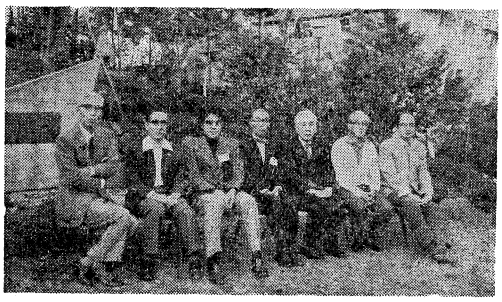
企画者の村上陽一郎氏は、主題の主旨について次のように述べた。「自然科学は、歴史的にもあるいは認識論的にも、キリスト教信仰と密接に積極的に結びついていると考えられるに到っているが、しかも今日科学技術の発展が、単に公害などの面のみならず、人間の内なる本性を著しく破壊しつつあるといわれるとき、キリスト教が科学と根拠を同じくするとすれば、キリスト教はそうした事態にどのように責任をとろうとするのか、いや、キリスト教が求める『人間性』を科学に対してどのように要求して行くのか、という問題は、両者を敵対的に理解する場合よりも遙かに複雑な構造をもつに違いない」。

セミナーの構成は全体講義に哲学と医学の二本の柱を建て、科学思想史、キリスト教神学、認識論、精神医学の四人の専門家によるセクション演習が配された。シンポジウムには医学史の専門家である川喜田愛郎博士(当ハウス理事長)と共同セミナー委員(ICU教授)勝見允行氏も加わり討論の輪はさらに拡がった。

当初は約一二〇名からの応募があったが、討議内容の充実を目指し三〇大学から八七名の参加者に限定することによって、文系三四名、社会系二四名、理系二三名と主題にふさわしい専攻分野の構成をみた。なかでも医科系の学生が六名参加したことは特筆に価しよう。また、キリスト教学校教育同盟を通じて中・高校教育に携わる社会人が三名参加したが、これは飯田館長が長年考えてきた生涯教育の場を実現したものである。

全体講義で吉利氏は、医療および医学におけるヒューマニズムと科学主義との矛盾を平易に説明したあと、T・シャルダンの所説によりながら新しい統合を目ざすヒューマニズムが医学の分野にも必要であることを強調した。また、山崎氏はそのユニークな弁舌で聴衆を沸かせ、創造主の叡知を読みとる敬虔な自然学が産業革命を契機に近代自然科学へと変容した要点について、哲学史上の問題を敷衍しながら次のように結んだ。近代自然科学は客観的真理に迫ろうとした壮大な試みとしてある程度成功したが、真理を追求するあまり善美なものをまで廃棄せんとする傲慢さに陥ってしまった。もともと真善美が一体となっているのが人間の世界である。美しさや、やさしさの価値が見直されなければ二一世紀は拓けない、と。

学問の二大分野にまたがる大問題を前にした学生達は、現代人の深刻な病巣に根づいている主題の重みに改めて気づいたようである。



右より荻野，柿内，川喜田，山崎，村上，八木，飯田の諸氏

「ゼミナール」雑感

東京工業大学教授　八木誠一

他大学の学生と泊り込みでゼミナールをもったことは何度もある。そしていつも自分ひとりで喋り過ぎたという苦い思いを抱いて帰ってくる。勿論こちらにも言い分はないわけではない。何しろキリスト教神学の現状はといえば、キリスト教の根拠と本質に関する見解の一致が失われていると言っても過言ではない。少なくとも現代の問題を無視せずに考えている人達の間ではそうだ。だからキリスト教とは何かということになると、通念ではなく自分の考えを自分の責任で述べなくてはならなくなる。するとどうしても話は長くならざるを得ないわけだ。

おおソクラテス尊者、あなたは何故に若人のみを愛し召される。

おお友よ、思索いと深き処に及んだ者は活気充ち溢れるものを愛するのです。

ヘルダーリンがこう歌ったソクラテスは「産婆術」にたけていたという。彼は教えず、議論をしかけては相手の考えを引き出し、自分で造型するように仕向けたという（もっともプラトンの対話篇を読むと誘導訊問をしているとしか思えないところもあるが）。講義ではなくゼミという以上、若者に対する教師はぜひともこうでなくてはならないわけだ。

頭ではこう思っている。しかしこの点であまりうまくいったことはない。議論を出発させようにも、われわれの時代はソクラテスの時のアテネとは違って、誰しもが一致出来る共通の見解がないの

だ。以前から議論好きだった私にとって、実は対話ほど望ましいものはないのだが。

それで私はだんだんこう思うようになった。「ゼミナール」という言葉はラテン語の動詞 sero（種をまく）、名詞 semen（種）と同根の seminarium に由来するもので、これは苗木のことである。しかし二、三泊のゼミでは私には苗床の世話までは覚束ない。だから種をまけばそれでよいと考えたらどうだろう。恐らくうまく合った土壌に落ちた種は発芽して育ってゆくだろう。などと考えるものだから、余計問題の所在だけを述べる形で、喋りまくる結果となったらしい。

ゼミの数日後、OB会を開催しますという通知があった。今度こそ学生同士の対話に耳を傾けようと思う。

若い魂との触れ合いの場

東京都精神医学総合研究所参事研究員　荻野恒一

三日間を終って、「参加して本当によかった」という実感をしみじみ感じた。わたしだけ除けば、参加している先生方は、文字どおり第一級の先生がたばかりで、全体講義の先生のお話や、クロス・セクショナルな討論会をも含めて、大変勉強になった。もっと影響を受けたのは、泊り込みの先生方の熱意である。「先生方は御自分の研究に熱心であるだけでなく、本当に学生たちがお好きなのだな」とつくづく感じいった。

しかしそれにもまして「本当によかった」と感じたのは、久しぶりに学生さんたちと語り合ったことである。わたしは、大学を卒業して付属病院の助手になった時期を含めて、四年半前にいま勤めている研究所にくるまで約四半世紀のあいだ大学に勤めた経験しかなく、研究所にきて「やっと学生から解放された」という安堵感を感じたのであるが、今回セミナーに参加して、「大事なことを忘却していた」という想いに駆られたわけである。それは、「若々しい魂に映っている一つ一つの人生のイメージは、限りなく美しい」という事実である。わたしはセミナー中、「自分自身わかり切ったことだ」と思っていた事柄が姿を変えて生き生きと見えてきたことがしばしばあった。

共同セミナーに参加して

（Dセクション）　白石弘己

漠然としたイメージしかないキリスト教の知識と、臨床経験をにとんど持たぬ精神医学に関する知識とから簡単に何か引き出せると思ったのは、たしかに見通しが甘かった。それにもかかわらず、あえて我々がこのセクションを選んだのは、一人一人が自分固有の問題を持ち、精神医学ないしキリスト教、あるいはその両者の交錯する領域に、何がしかのヒントが与えられると信じていたためだと思う。その意味で一人一人の発する言葉には重みがあった。荻野先生は、そんな我々の言葉をじっと聞いてくれ、いわば、共通の広場の明るみの中へみんなを連れ出そうと努力して下さった。現存在分析や御自身のニューギニアや日本各地での臨床例の紹介を適宜はさみつつ、宗教的実存の回復を説かれ、参加者一人一人は、自分自身の問題を精製し、解決の糸口をみつける上で大変参考になったことと思う。

何よりも今回の成果は、学問の厳しさを再認識させられたことであった。第二次大戦中、赤紙がいつ来るかわからぬ中で、我々の先輩は一冊の本を三読、四読し、眼光紙背に届く程に学問をしたのだ。それが、戦後に一斉に花開くことになったのを思うにつけ、問題意識があることだけで一人前の顔をし、いざ話すとなるとそれさえ満足に展開できぬことに驚き赤面したのは決して私だけではあるまい。荻野先生は、現代人にとって宗教とは眼の前にあるのに食べようとしないパンだと仰言った。しかし、学問もやはり同じなのではないか。話し疲れて、一人で真夜中の道をひきあげて来ながら、私は話した、という充実感とともに、もう話す必要のないことに大きな充実感を覚えた。

（東京医科歯科大学5年）

学ぶ側に回った三日間

常間地ひとみ

今回は、たまたまキリスト教学校教育同盟の紹介と本校の研究日制度によって参加をゆるされましたが、学校という職場の中にもっともっと学ぶ雰囲気が浸透して教員同士が研鑽しあう場ができてくれればと願うものです。

それにしても、本当に素晴しい三日間でした。今後も企画がありましたら学校業務の許される範囲で参加したいと願っておりますので、ぜひお知らせ下さい。そしてもっともっと学ぶ場と、共に学ぶ仲間と、そして教師とを求めている人たちがこのような場に加わることができるようにしていただきたく存じます。

（関東学院中学校教諭／館長宛書簡より）

●事業部だより

＜10・11月の利用状況＞

全国的規模の研究集会、学会で賑わう

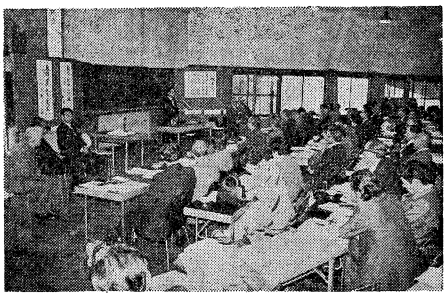
10月はゼミ回数一〇二、宿泊延人数三、九九〇人、11月はゼミ回数八五、宿泊延人数三、〇一一人である。

●秋は学会、研究集会の季節である。10・11月の両月、各大学のゼミ・グループに混って、左記の諸集会が開催されている。学会シーズンの一面を知ることができる。

有機固体研究会
電気学会セミナー
物理学会格子欠陥分科会議
地域構造研究会
氷の物理・化学に関する研究会
実解析セミナー
小児神経学セミナー

日本油化学協会界面化学研究会

そのほとんどが全国的集会で、参加者の分布は北海道から沖縄までの日本列島に広がる。なかでも各地の大学から教師、研究員、学生一二〇人を集めた物理学会、全国の大学病院や官公私立病院の勤務医一七五人を対象に小児神経学会が主催した第7回目の〝卒業教育セミナー〟は、特に大型の集会であった。四日間全館を使用した後者の場合には、今回も電子顕微鏡などの機械類を搬入しての実験風景が見られた。当ハウスとはおなじみとなった学会も多くなり、熱心な研究の合間に飯田館長がお茶の席などを設けることも多い。北海道大工学部が世話役となって開催された氷に関する研究会では、指導に当たられた北大・東晃教授に参加者が謝意を表すために集めた寄付金一三、〇〇〇円が、


全国専修学校指導教員研修会

記念植樹としてこの丘に残され、当ハウスとの友好を深められた。

●11月中旬には、当ハウスでは初めての二つの集会が連続して開催されているので紹介したい。一つは14・15の両日、一五大学の教務・学生・厚生部課長四五名が参集し、文部省の担当官も出席して行われた第65回東京地区国公立大学厚生補導部課長会議。参加大学のほとんどが当法人の協力会員校であり、しかも出席者の多くは日頃当ハウスと密接な連絡を保つ事務担当部課の代表者でもあるので、実際の生活体験を通して当ハウスの理解を深めて頂くまたとない機会となった。今回は東京医科歯科大が当番校として当ハウスへの〝誘致〟を試みたものだが、討議にも親睦にも成果を上げて好評が得られたと、幹事役を務められた同大学学生掛長・栗林恒雄氏は喜ばれた。

●もう一つは、15日から3日間開かれた全国専修学校各種学校総連合会主催の「全国専修学校指導教員研修会」。昨年学校教育法が一部改正され、専修学校が制度化されて以来初の指導教員研修とあって、開講式での関係者の挨拶からも今回の集会が「開け行く専修学校の原点」としてのシンボリックな意味をもつものであることがうかがえたし、全国各地から参集した一四〇人の指導教員は、学歴社会日本の中で新たな脚光を浴びつつある専修学校の役割を、平塚益徳国立教育研究所長による「教育の現状と課題」と題した熱のこもった講演から学んだようである。

●11月26・27日の週末に開かれた日豪合同セミナー「両国関係の展望」もまた、特筆すべき集会であった。このセミナーは、三年前、当ハウス主催の国際学生セミナーに参加した豪州留学生五名が中心になって開催した同種のセミナーを引き継いで企画されたもので、今回は二年前東京に開設された日豪学術文化センターが主催し、前回より規模の大きなセミナーとなっている。参加者計九六人（うち宿泊者七三人）のうち豪州留学生が一六人、各界の有識者・専門家も三〇人を数えた。グレゴリー・クラーク上智大客員教授、賀陽治憲外務省領事移住部長による基調講演に続く分科会では、文化交流、教育、最近の経済関係、アジアにおける日本と豪州の役割等をテーマに、深夜まで積極的な意見の交換が行われた。この成功に励まされた日豪学術文化センターから「同セミナー開催を秋の定期行事の一つとしたい」との報告が寄せられている。なお、野外ステージで行われた開会式にはジョン・メナデュー豪州大使ご夫妻はじめ各方面からの招待者も出席し、豪州のワインとチーズが添えられたパーティではなごやかな交歓風景が展開された。当ハウスでは27日の遠来荘茶道教室に両国の参加者を招いて歓迎した。

＜キャンパス・トピックス＞

●10月11・12日利用の玉川大教育学科一七二名は、12日朝、建築中の国際セミナー館の反対側の斜面に白樺の木四本を記念植樹した。また、世界連邦建設同盟青年学生部も11月27日、中央セミナー館近くにシャクナゲの植樹を行った。

●横浜国大教育学部二〇名が11月5～7日、東京天文台にも勤務する井上允講師の指導のもとに、天文学観測実習で来館。大セミナー室屋上に天体望遠鏡を設置して、秋の夜空を観測した。

●11月19・20日の週末、オランダ国立工業試験場長ピーター・フィリメレン博士が、東京農工大・川村亮教授の案内で一泊し、大学共同の施設に強い関心を示された。博士は革皮の権威者で、東京都が公害問題指導のため招へいした。

＜館長招待朝食会＞

10月1日＝伊藤隆吉成蹊大名誉教授、3日＝佐藤誠三郎、中村隆英両東大教授、8日＝坂本義和東大教授、第93回共同セミナー指導教授、21日＝日本女子大桜楓会・菅支那名誉教授他八名。

11月7日＝飯島宗享東洋大教授、鈴木慎一早大教授、12日＝第94回共同セミナー指導教授、川喜田愛郎当ハウス理事長、山内恭彦当ハウス顧問、17日＝全国専修学校指導教員研修会指導者

＜交歓会寸描＞

10月8日＝第93回共同セミナーを含む四グループ（二七大学）一九七名が夕食時に交歓。古田勝久東工大助教授スピーチ。全員の合唱の他早慶両校の名演技続出。

11月6日＝夕食交歓会に九グループ一九〇名。第17次南極観測越冬隊長の重責を果たされた芳野赴夫電通大教授がスピーチ。東京外国語大コンツェルトがロシア語演劇の一幕を披露。全員の大合唱。

11月12日＝第94回共同セミナーを含む五グループ（三三大学）一八八名が参加。共同セミナー指導の山崎正一法政大文学部長のスピーチなど。

映像と民俗学講座

映像民俗学を考える会主催 52年11月25～27日

民俗事象を生きた動きとしてとらえる映像（映画・ビデオ）は、今後の民俗調査に重要な役割を果たすのではないかと考え、私たち（野口武徳・宮田登＝民俗学、野田真吉・北村皆雄＝映像）は、49年11月にささやかな会を創設し、活動を続けてきました。

今回の「映像と民俗学講座」は、これまでに行ってきた民俗資料映画の上映会や映像民俗資料所在調査に続くもので、映像に興味を持ち利用してみたいという民俗学に携わる人、あるいはその逆の立場にある人たちに広く呼びかけ、「映像民俗学」を存在させ得る理論と方法、更にその実際について共に考え、学びあう事を目的としました。

ゼミナールは、①「考える会」の四人のメンバーの講義、②映像民俗資料の上映、③討論、で構成し、最終日には、岡正雄先生の映像人類学に関する特別講演をお願いしました。

参加された方々は、年代・地域共に拡がりがあり、参加動機もさまざまでしたが、長時間にわたって集中を要求するプログラムにもかかわらず、終始熱心に受講を続けられ、映像民俗学の姿（それは未だ朦げな所を残してはいるのですが）を把んで戴けたと思います。

映像に携わる人々は民俗学について学び、民俗学に携わる人々は映像について知る、という最小限の交流すら難しかった二つの分野が結びつき、共に進みはじめる第一歩として今回のゼミナールを評価して良いと思います。

（文責「考える会」事務局・小川克巳）

●館長日記から●年賀状にかえて

新春の多摩の丘で、縁故ある多くの方々のご多幸を祈っています。ゼミで、学会で、研修会で、読書会で、そして個人のご執筆でご利用下さる皆様のおでかけを職員共々お待ちしています。会えば別れがつらいのでなく、人生における出会いの不思議さに意義を感じるからです。もてなすことがたのしいからです。◆私は例の如く松下館の真理の鐘を大晦日につきました。開館十三年目の正月をこの丘で迎えたわけです。そして六八になりました。どうしたことか老境に入ったという気持は全くない。今年は午の年という。私が「快馬一鞭」という言葉を知ったのは二〇の青年の頃であった。恐らく自分を快馬と思いこんで、この言葉に感銘したのであろう。いただいた年賀状の中に、かくありたいという願いをこめた馬の絵が多い。すばらしい作品もあって、私の小さい客間は馬の小品画のサロンになった。◆午の年は古来、飛躍の年というから、そうありたいとは思うけれど、「知足安分」という人生訓もある。春の霞がたなびくように、心のどこかに、心豊かに生きる心がけも必要であろう。◆「いい正月ができますよ」といわれたのは文部省留学生課長の光田さんである。12月27日の別れの挨拶である。日本と外国の学生達に文化接触の機会を与えるセミナーに補助金がつくまでに漕ぎつけた者同志が交わしたよろこびであった。◆今年は大学セミナー・ハウスの活動と環境に新鮮な転機をもたらす記録すべき年となってほしい。日本では、どうしても仲間うち、同じレベルの人達だけが集まるが、国籍、専門分野、年令、思想的背景を異にする人々が集まる場所がない。国際セミナー館は、以心伝心で語るのでなく、欧米流のイデオロギー人間になって、たくましく問うて答える議論を交わす場である。◆人が出会うのはセミナー室だけではない。会談にまるみを与え、態度にゆとりを与え、友情に厚みを加える交歓の場所が必要である。5月にオープンする交友館サロンは、日中はコーヒー、ジュースの茶の間であるが、夜間9時からは、ビールが解禁となる。酒が入ってもペースが乱れてはいけない。「偉い人」が座の中心になってはいけない。すべての人が「出会いの一人」なのである。話に花を咲かす作法を学ぶ場所でありたい。◆この1月から前早稲田奉仕団総主事布施濤雄君が来られ、4月から事業部長に就任する。早大理工学部の出身で、東京神学大、米国アンドーバー・ニュートン神学校に学んだ五〇年の壮者である。二十余年にわたる奉仕団の経験を持ちこんで来たわけである。彼の健康な頭脳は、けだし快馬と呼ぶにふさわしく、私は時に一鞭を加えるであろう。

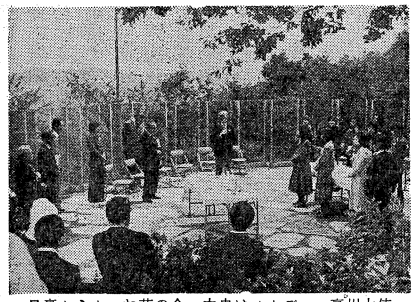
●利用状況

10月＝三、九九〇人
11月＝三、〇一一人

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用

■10月

東京薬科大学助手　磯部　正和
東京都立大学教授　東　洋一
成蹊大学教授　対木　隆英
明治大学助教授　松瀬　貢規
中央大学教授　吉村　二郎
東京大学助教授　石川　経夫
中央大学教授　鈴木　重生
日本女子大学助教授　麻原　美子
東京都立大学助教授　慶谷　壽信
学習院大学教授＊　荒井　良雄
東京薬科大学教授　森　陽
東京経済大学管理職研修会
東京都立大学助教授　大島　一郎
東京学芸大学助教授　鈴木日出男
日本大学教授　小田切松義
東京大学教授　佐藤誠三郎
東京学芸大学助教授　北村　好
法政大学教授　中村　孝俊


日豪セミナーお茶の会，中央はメナデュー豪州大使
（野外ステージにて）

東京大学教授　坂本　義和
東京工業大学助教授　古田　勝久
慶応義塾大学教授　池井　優
東京都立大学教授　大羽　滋
早稲田大学教授　竹内　理三
早稲田大学教授　伊東　克己
東京学芸大学教授　品川不二郎
東京学芸大学助教授　佐藤　和彦
東京大学教授　城塚　登
東京都立大学教授　清水　誠
東京都立大学教授　千葉　正士
日本大学助教授　遠藤　邦彦
青山学院大学教授　天利　長三
慶応義塾大学教授　十時　厳周
津田塾大学助教授　南塚　信吾
明治学院大学助教授　小野　哲郎
明治大学教授　玉田　弘毅
一橋大学教授　岡庭　武
東海大学教授　師岡　孝次
東京学芸大学助教授　斉藤　耕二
東京学芸大学生活綴方研究会
東京大学助教授　見田　宗介
工学院大学教授　葛岡　常雄
日本女子大学教授　菅　支那
青山学院大学助教授　関田　寛雄
学習院大学教授　辻　邦生
青山学院大学教授　木下　政久

明治大学教授　坂本　清
東京工業大学助手　近江　政雄
青山学院大学教授　日向寺純雄
早稲田大学教授　田村　恭
東京農工大学助教授　鹿野　快男
東京都立大学教授　森　重敏
東京都立大学教授　兼子　仁
東京工業大学教授　松田　武彦
法政大学教授　増島　宏
中央大学教授　亀山　三郎
上智大学教授　川田　侃
明治学院大学教授　秋元　徹
日本女子大学教授　岡本　栄一
明治学院大学教授　増田　茂樹
東京都立大学教授　関口　晃
東京薬科大学教授　志田　信男
淑徳大学講師　田中　一彦
広島大学助手　笠井　良次
城西大学助教授　中村　敏昭
産業能率短期大教授　深井　秀夫
国士館大学教授　木内　俊明
独協大学講師　杉山　好
玉川大学教授　倉岡　正雄
千葉工業大学教授　関　龍夫
共立女子短期大教授　青山　誠子
立正大学教授　杉澤　新一
有機固体研究会

Oct. 16, 1977

We appreciated so much participating in the inspiration and vision of Seminar House. May the idea prosper and lead to opportunities of many more to see a wider world, a clearer truth from this hilltop.

Mike Yarrow
Margaret Yarrow

Nov. 9, 1977

We greatly appreciate this opportunity to have fellowship and dialogue with people of different backgrounds—in this beautiful surroundings.

Many thanks for arranging this Seminar.

Lewis Benson
Sarah B. Benson

第93回大学共同セミナー
第1回内外人学者シンポジウム
（平和問題懇談会）
大学連合インター・ゼミ
ELI英語学研究所
第10回アジア地域出版技術研修コース（ユネスコ・アジア文化センター）
弓町本郷教会
祈月書院
全国働く婦人の家連絡協議会
全国専修学校各種学校総連合会
八王子市教育委員会
電気学会セミナー
物理学会格子欠陥分科会議
地域構造研究会
氷の物理・化学に関する研究会
実解析セミナー
立川スプリング
壁装材料協会
横河ヒューレットパッカード
京王プラザホテル＊＊
明治屋
日野協力会
多摩市役所
日本電信電話公社新宿局設計課
流研㈱研究会
郵政省貯金局
【個人利用】
多摩中央信用金庫　島田　好典

■11月

駒沢大学講師＊　谷敷　正光
一橋大学教授　烝場　準一
明治大学助教授　磯部　力
中央大学教授　経塚作太郎
上智大学スペイン演劇研究会　芳野　赴夫
電気通信大学教授　石崎　忠司
中央大学助教授　井上　允
横浜国立大学講師　大熊　一郎
慶応義塾大学教授　三浦　和男
慶応義塾大学助教授　宮坂富之助
早稲田大学教授　湯川　和夫
法政大学教授　飯島　宗享
東洋大学教授
東京外国語大学講師　タチアーナ・野村
早稲田大学教授　鈴木　慎一
明治大学教授　柴田　政利
青山学院大学理工学部教員研修会　波多江健郎
工学院大学教授　国井　隆弘
東京都立大学助教授　河野　恵
東京薬科大学教授　中村　浩三
早稲田大学教授　吉田　宣之
中央大学講師
東京経済大学教授　長島　文通
慶応義塾大学助教授　前田　昌信
工学院大学教授　中島　康孝
東京大学教授　高野　暲
東京薬科大学教授　志田　信男
東京家政大学助教授　宮崎　照子
東京都立大学教授　千葉　正士
慶応義塾大学教授　石坂　巌
東京都立大学助教授　大岡　忠一
立教大学教授　水本　浩
慶応義塾大学助教授　関根　智明
東京学芸大学助教授　鈴木日出男
中央大学教授　岩田　巌雄
慶応義塾大学教授　有賀　一郎
東京大学助手　渡辺　治
東京都立大学助教授　児玉昭太郎
一橋大学助教授　石　弘光
慶応義塾大学教授　山田　辰雄
津田塾大学教授　藤村　瞬一
慶応義塾大学教授　鳥居　泰彦
東京都立大学教授　清水　誠
東京都立大学教授　平田　光穂
東京大学助教授　鈴木　基之
大正大学助手　末広　照純
高千穂商大助教授　名越二荒之助
流通経済大学硬式野球部
富士短期大学助教授　平野　文彦
中央学院大学助教授　西脇　敏男
和光大学助教授　篠原　睦治
淑徳大学講師　田中　一彦
日本女子大学附属高等学校
第2回内外人学者シンポジウム
（クェーカリズム研究懇談会）
第94回大学共同セミナー
日豪合同セミナー（日豪学術文化センター）
小児神経セミナー（日本小児神経学会）
界面化学研究会（日本油化学協会）
国民生活センター
横浜キリスト教青年会
都公立保育研究会
東京地区国公立大学厚生補導部課長会議
全国専修学校指導教員研修会（全国専修学校各種学校総連合会）
東京YWCA専門学校
ボーイスカウト東京連盟西部地区
久遠キリスト教会
日本キリスト教会東京中会
市川きもの学院
世界連邦建設同盟
映像民俗学を考える会
三井東圧化学
多摩市役所
日本自動車査定協会
立川スプリング＊
横河ヒューレットパッカード
東京芝浦電気
郵政省簡易保険局
【個人利用】
野村総合研究所　山田　善靖
一橋大学講師＊　佐藤　共子
東京農工大学教授　川村　亮

■編集後記

本号は、夏から秋にかけて行われた国際的集会をまとめ、国際プログラム特集号として編集した。この特集記事のために、国際プログラム委員会委員長の川田侃上智大教授が一文をお寄せ下さり、このプログラムの第一歩を祝福して下さった。

なお、紙面の都合で千人会のご報告を割愛せざるを得なかった。また、寄贈図書のご報告が大幅に遅れてしまっていることを併せてここにお詫び申し上げたい。（能）

朝日新聞社

新聞広告一〇〇年

上・下巻

朝日新聞創刊百年

一、四三三点の図版と犀利な文章で綴ったユニークな広告世相史

新しい情報化時代への指針

全日本広告連盟理事長　河口　静雄

一世紀にわたる朝日新聞の紙面から代表的広告をピックアップし周到な編集によって刊行された生きた広告史である。文明開化の昔から、波瀾万丈の変遷をへて今日に至った新聞広告の歩みを通じて、日本文化の消長を、まのあたりに見ることができる。

絶賛発売中!!　定価各四、八〇〇円